

平成 31 年度 学校経営方針

校訓 親和と協力



カタカナの「ク」を6個組み合わせ「クロ」＝「黒」と読みその中に「井」と「小」を入れて「黒井小」を図章化し、「ク」のつながりと組み合わせが「親和と協力」を象徴している。



- P 1 教育目標 めざす子ども像 めざす学校像
学校経営の基本方針 本校の特色ある取組
 - P 2 子どもたちの課題
 - P 3 学びの基盤をつくる
～学校生活すべてにおいて取り組むこと～
 - P 4 主体的に学びに向かう子どもの育成
 - P 5 新学習指導要領に基づいた学習活動の推進
 - P 6 質の高い効率的な組織運営の実現
- 資料 H30 研究の概要

丹波市立黒井小学校

〒669-4141 兵庫県丹波市春日町黒井 2205

TEL0795-74-0035 FAX0795-74-2697

ホームページ <http://www.tamba.ed.jp/site/kuroi/>

学校教育目標

地域に誇りを持ち 未来を切り開く 黒井っ子の育成 ～自立・協働・創造～

めざす子ども像

- 自立** 「わたしにもできる わたしだからできる」と
夢や希望を持って主体的に取り組む子ども
- 協働** 集団の中で自分を活かせる子ども
- 創造** 自立・協働を通じて、新たな価値を創造し
ていく子ども

「超スマート社会(Society 5.0)」「人生100年時代」の到来など予測困難な将来を迎える子どもには①あきらめることなく②かといって背負い込むことなく③多様な人とコミュニケーションを取りながら④よりよい解決策を見出す力身に付けさせたい。



めざす学校像

- 豊かな心、正義の心、思いやりの心を育む学校
- 学ぶ喜び、学習での仲間とのふれあいによって質の高い感動を創造し、自らを磨く学校
- 社会で生き抜く力、自己教育力、人間力を身につけ、10年後、30年後に自らの力を発揮できる人間を育む学校
- 社会教育・学校教育・家庭教育を連動させた教育によって、知徳体のバランスの良い成長を目指す学校

学校経営の基本方針

- 【共生社会の形成】人権尊重の精神・特別支援教育の視点を持つ
- 【ビジョンの共有】子どもがどうなればいいのか（目的）、それは何によって促されるのか（手段）を共有する。
- 【チーム黒井】組織力を発揮し、一步一步積み重ね、必ずやりきる

本校の特色ある取組

1. 国語教育を軸とした「主体的・対話的で深い学び」の視点に立った授業
2. 黒井の「ひと」「もの」「こと」を活かした伝統ある「ふるさと学」
*H31年度 兵庫県地域連携スキルアッププログラム
3. 県立氷上高等学校との連携
4. 孔雀の飼育活動を通した「命」の学習



10の重点目標

学びの基盤をつくる

～学校生活すべてにおいて取り組むこと～

重点1 言語能力の育成（教科等横断的な視点）

「言語能力」はコミュニケーションの力である以前にもっと大事な、認識の力、思考の力、判断の力である。「言語能力」を確かな学力と豊かな心を育む基盤とし、思考力・判断力・表現力を育成する。

目指す子どもの姿

- 十分な語彙・語感を持っている 【読む】
- 確かな根拠を持って自分の考えが書ける・言える 【話す・書く】
- 伝える相手を意識して表現できる 【話す・書く】
- 相手が何を伝えたいのかを聞き取り考えを深めるられる 【聞く】



重点2 身体能力の育成

様々な動きを通して脳と体を結びつける神経細胞が著しく発達する小学生の発達段階を踏まえ、遊びや運動を通して、バランス感覚・リズム感・敏捷性などを養うとともに、発達改善の視点も持つ。

目指す子どもの姿

- 道具やルールを使った運動や遊び、色々な種類のスポーツに取り組む
 - 背筋を伸ばして座り、しっかりと立つ
- 目標指数 体力テストで全国標準に近づける



重点3 「自分がされていやなことは 人にしない 言わない」

黒井小学校のルールの最上級に位置づけ、子どもだけでなく大人のルールでもあることを共有する。すべての職員が、「自分がされていやなことは人にしない、言わない」というフレーズを意図して使う。

目指す子どもの姿

- 目的を達成するために他者と協力する
- 人権感覚を持っている
- 共生社会の実現をめざす



*自浄能力（組織内の悪弊を自分たちで改めることのできる力）を育てていく。

*見る力や聞く力、人とコミュニケーションをとる力、感情をコントロールする力、計画を立てる力、身体をうまく使う力といった本人の発達レベルに応じたちがいを受け入れる土壌を作る。

主体的に学びに向かう子どもの育成

重点4 系統的なキャリア教育を積み上げる

目指す子どもの姿

- 適格な目標設定ができる
- 振り返り活動を習慣的に行える
- 「こんなふうになりたい」というロールモデルがある
- 様々な大人やプロフェッショナルに出会う



- 目標指数 アンケートの達成率を上げる⇒6年児童「見通しをもって計画的に進めたり、そのやり方などについて改善を図ったりしていますか」H30：68% ⇒全校児童「目標の時間（学年×10分）家庭学習に取り組んでいますか」H30：76.9%

中2プロブレム（勉強嫌いが6割超）や、主体的に進路選択ができないなどの小学校以降の課題を踏まえ、何のためにその学習をするのか、学習してどのような進歩があったのかを実感させ、内発的動機付けにつなぐ。

【キャリアとは】人が生涯の中で様々な役割を果たす過程で、自らの役割の価値や自分と役割との関係を見出して行く連なりや積み重ね。

重点5 ふるさとに生きる基盤を培う「たんばふるさと学」の推進

目指す子どもの姿

- 黒井の地域や人が好きである
- 地域の様々な大人やプロフェッショナルに出会う



重点施策

- 黒井版「たんばふるさと学」の全体計画づくり
- 学校支援コーディネーターの参画によるふるさと教育の推進体制づくり

* 「教科等横断的な視点」の総仕上げが、「たんばふるさと学（総合的な学習の時間）」と捉え、重点1で挙げた①言語能力の他に、②情報活用能力、③問題発見・解決能力を培う。

新学習指導要領に基づいた学習活動の推進

重点6 対話的で深い学びを支える授業づくり

重点施策 前年度のまでの研究成果に改善を加え、誰にもわかる形にしながら深める。

- 「考え方のずれ」「関係づける思考」を活かした主体的・対話的で深い学びの視点に立った授業改善
- 国語科から他教科へ実践を広げる
- 目標指数 全国学力・学習状況調査→全教職員による分析と指導の改善
丹波市定着度調査→同一学年経年比較で前年度を上回る

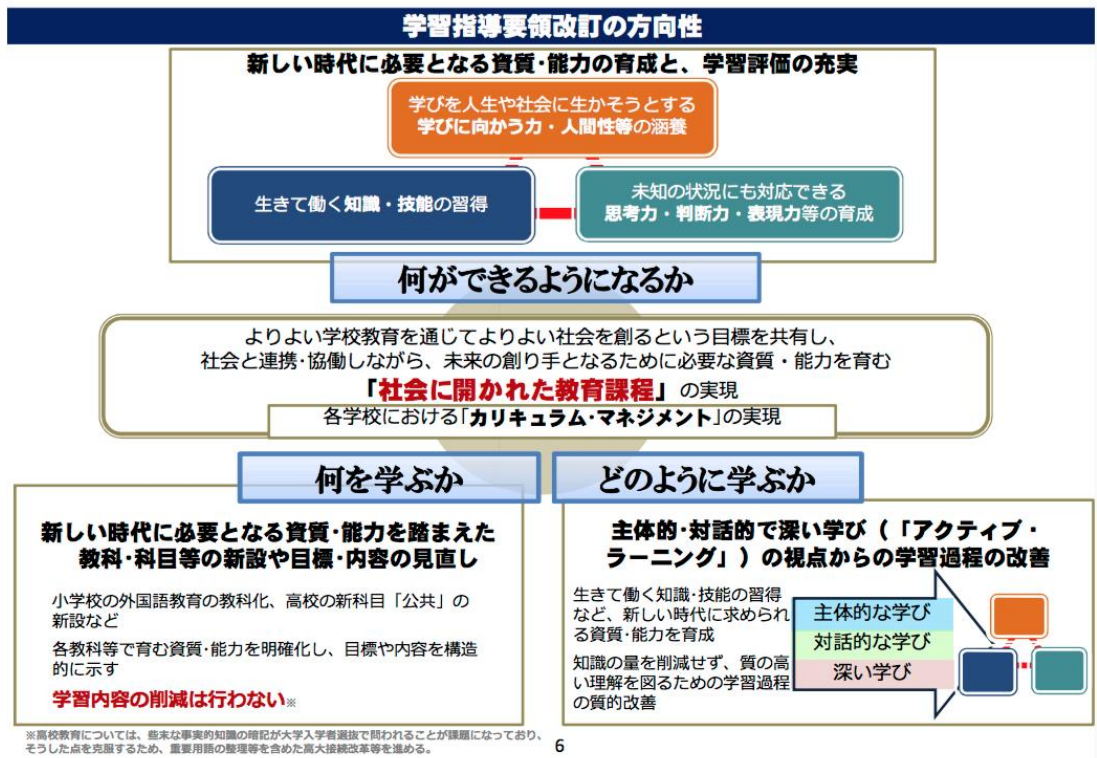
重点7 知識から21世紀型能力へシフトする

重点施策



- 使える外国語教育をめざした取組の充実（海外との沿革交流学習の実施）
- プログラミング的思考を育むプログラミング教育の理解を深める校内研修の実施
- 「3つの視点」や「見方・考え方」を働かせた授業イメージや、子どもの姿をつかむ

教科等	見方・考え方
国語	対象と言葉、言葉と言葉の関係を問い直し、言葉への自覚を高める
社会	社会的な見方・考え方を働かせ、社会的事象の意味や意義を考える
算数	数量や図形及びそれらの関係などに着目し、論理的・統合的・発展的に考える
理科	科学的な視点で捉え、身近な自然の事物・現象とつながる
生活	思いや願いを実現していく中で、対象を自分との関わりで捉えている
音楽	音楽に対する感性を働かせ、音や音楽を、音楽を形づくっている要素と働き方の視点で捉え、自己のイメージや感情、生活や文化などと関連付ける
図画工作	形や色などの造形的な視点で捉え、意味や価値をつくり出す
体育保健	運動や健康の課題を、仲間と共に試行錯誤しながら解決する
家庭	学習対象としている生活事象を協力・協働、健康・快適・安全、生活文化の継承・創造、持続可能な社会の構築等の視点で捉え、よりよい生活をつくる
外国語活動 外国語	コミュニケーションを行う目的や場面、状況等に応じて、情報を整理しながら考えなどを形成し、再構築していく
道徳	自己を見つめ、物事を多面的・多角的に考える
特別活動	互いのよさや可能性を發揮しながら、集団や自己の生活上の課題を解決する
総合的な学習の時間	実社会・実生活の課題を探究し、自己の生き方を問い続ける
特別支援教育	自己のもつ能力や可能性を最大限に伸ばして活動する
健康教育	生涯を通じて健康、安全で活力ある生活を送るための基礎を培う
キャリア教育	教育活動全体を通じて、社会的・職業的に自立した人間を育成する
少人数学習指導	小規模校・少人数学級の利点を生かす
幼年教育	子どもの発達と学びの連続性を保障していく



質の高い効率的な組織運営の実現

重点8 教職員個々のスキルアップ ～人づくりは人づくりから～

- 学団や分掌によるOJTの推進
- 服務規律の徹底とマナーの向上
 - ・法令の遵守（体罰、個人情報、安全運転、他）
 - ・接客能力の向上（電話、来客対応）



重点9 組織的な学校運営の実現 ～チーム黒井～

- 建設的な「報告・連絡・相談」の徹底
- 交換授業の実施→1回以上
 - ・全職員が児童や学級を的確にアセスメントし、より適切な指導方法、支援体制をつくる
 - ・全職員は全校児童の担任であるということの、双方の認識を持つため
- 同室複数指導・少人数指導の充実
- 校舎大改修への全面協力と児童の安全確保
- コスト意識高揚（時間・経費）
- 目標指数 いじめの認知件数に占める、解消しているものの割合の改善
- 目標指数 水曜定時退勤の完全実施と年間10日以上以上の休暇制度取得の促進

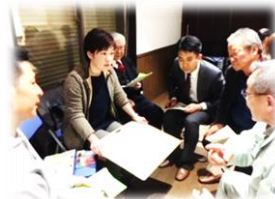
重点10 社会に開かれた教育課程

「社会に開かれた教育課程」という概念に期待されているのは、実践そのものの新たな創出や改善ではない。期待されているのは、既存の取り組みの位置づけをメタ認知的に総括し、改めて意識付けすることである。「目標」を再検討したり、「目標」と実践との結びつきを確認したり、実践を効果的に行うための組織のあり方について整備したり、実践の効果をチェックする仕組みを工夫したり、成果を発表する体制を整えたりすることである。

□コミュニティ・スクール導入

推進計画)

- 2月 第1回熟議「黒井っ子の未来を考える会」
- 3月 第1回準備委員会
- 4月 PTA総会を中心とした保護者・家庭への周知と参画意識の醸成を図る
CS準備委員会だより第1号発行
- 5月 黒井自治協議会総会での地域住民への周知と参画意識の醸成を図る
第2回準備委員会
- 6月 第2回熟議「黒井っ子の未来を考える会」
地域住民への黒井小CSの概要説明
- 7月 CS準備委員会だより第2号発行
地区懇談会
保護者への黒井小CSの概要説明
- 8月 第1回学校運営協議会
CSだより第1号発行
- 9月 第2回学校運営協議会
- 11月 第3回学校運営協議会
- 12月 CSだより
- 2月 第4回学校運営協議会



□ 校種間・関係機関との連携

- ・ 幼児教育との円滑な接続（スタートカリキュラム）
- ・ 校種間連携による学習プログラムの実施
- ・ 外部専門家との連携推進体制の構築（特別支援教育、情報モラル教育など）

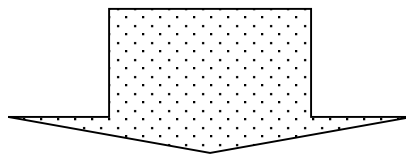
参考資料1 平成30年度 研究の概要について

1 主題設定の理由

本校の児童は、基本的な生活習慣や学習習慣が身についている児童が多く、同学年・異学年・男女のつながりも良好で、規範意識も高く、落ち着いて学校生活を送ることができている。また、学習に対しても主体的に取り組むことができる児童が多く、全国学力・学習状況調査や校内アンケートの結果をからも、主体的に取り組む児童の割合が増えてきている。全国学力・学習状況調査の結果も国語・算数ともに、全国平均を上回る結果へと結びついてきた。そのような実態の中、昨年度から2年間、丹波市教育委員会の「新たな学びの形態研究事業」指定を受け、『対話的な学びを通して、児童の思考を深める国語科授業～新たな学びのプロセスの構築を目指して～』を研究主題として、次期学習指導要領を見据えて、「異質な他者との対話的な学び」のあり方について研究の内容を焦点化し研究を進めてきた。

具体的には、【①一人学びで考えたことをもとに集団思考の中で学習を深める】、【②最終的な学習の成果物のどの部分がどの程度できていけばよいかという評価の尺度としての評価指標を設定し、単元の指導計画の中に対応する指導場面を保障していく単元づくり】、【③次期学習指導要領に明示されている学習過程の中で、異質な考えを有する他者と探索的な話し合いの場を設けて、児童の思考を深める】という本校の定義する新たな学びのプロセスの中で、特に授業の中で、異質な他者との探索的な対話の場面を設け、その中で児童の思考が深まったかについて検証してきた。研究の成果として、児童の側では、対話的な学びの中で、自分達で「新たな分かり」を考え出そうと主体的に取り組む姿や、友だちの考えを受け入れるだけでなく、「共通点・相違点」を明らかにしようとする姿で、より良い考えにしていこうとする姿が見られるようになってきた。しかし、論理的に話し合う中で自分たちの考えを深めていくまでには至っていない。また、教師の側では、異質な他者との対話の中で児童の思考を深めるためにどのような手だてが必要なのかということや、対話する児童たち（ペア・グループ）への関わり方、指導・支援のあり方について課題が残っている。

今年度は、他者との考えの〈ずれ〉を自覚して学ばせたり、論理的に話し合っ「新たな分かり」を導き出したりするよう、対話の質を向上させていく必要がある。そのため、次期学習指導要領の「知識及び技能」に新設された情報の扱い方に示されている情報と情報に関係づける思考に着目し、そこから国語科で育成すべき8つの【関係づける思考】に焦点化して活用していく。この【関係づける思考】を促すことが論理的な話し合いにつながり、児童の思考を深めるのに効果的であるという仮説を立て、次のように研究主題を設定した。

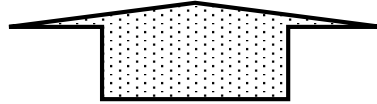


研究主題

『対話的な学びを通して、児童の思考を深める国語科授業』
～考えのずれに着目し、関係づける思考を活かした学びを目指して～

2 研究仮説

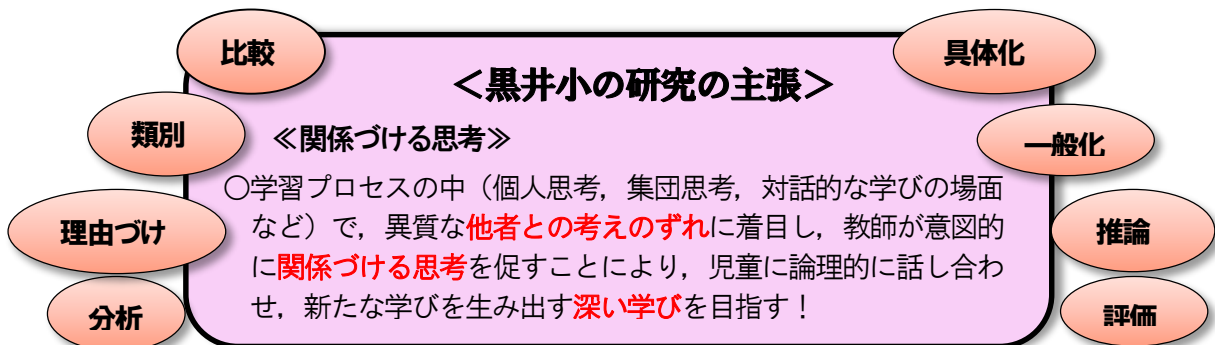
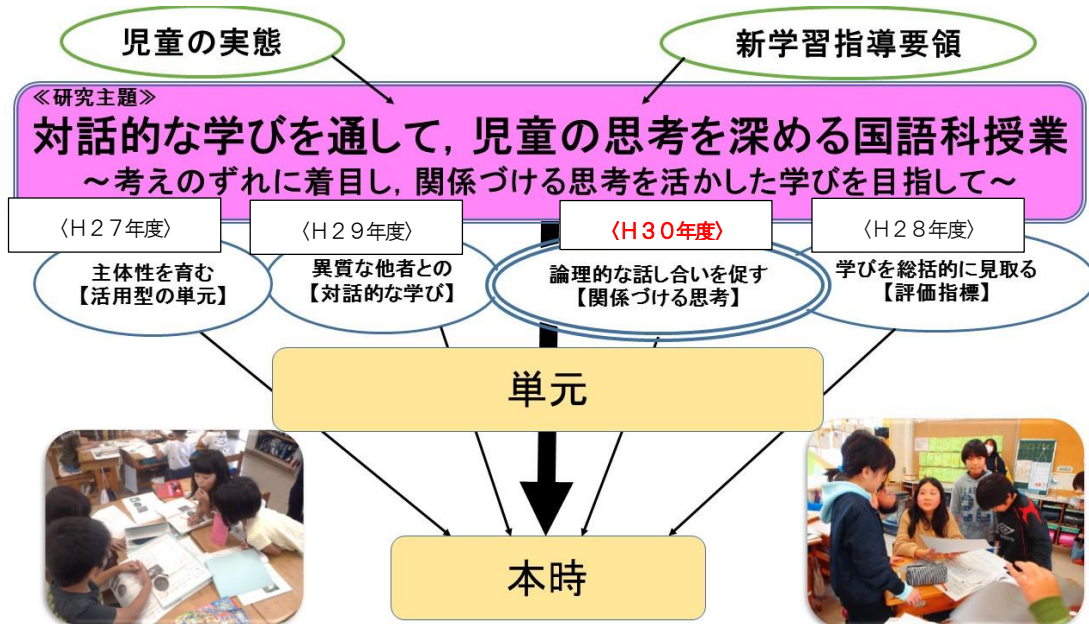
◎国語科の授業において、評価規準や評価指標を具体化し、言語活動を通して育てたい言語能力を明確にした単元・授業づくりを行う。学習過程に沿って有効な対話的な学びを見定め、考え方の〈ずれ〉に着目し、異質な他者との探索的な話し合いの場を設定する。その中で、関係づける思考を促し、論理的に話し合う学びのプロセスを構築していけば、自律的に学ぶ力が身につき、児童の思考が深まるであろう。



《研究仮説達成のための方策》

- (1) 「言語活動」と「育てたい言語能力」の関係を明確にした単元・授業づくり
- (2) 評価の具体化（評価規準と評価指標），対応する指導時間の保障
- (3) 学習過程に沿って，有効な「対話的な学び」の方法や内容，効果の研究
(※H29年度研究の重点)
- (4) 論理的な話し合いを促す関係づける思考 (※H30年度研究の重点)

3 研究の概要図



4 研究の内容

H29年度は、新たな学びの形態を目指して、本校がそれまでの過去2年間の国語科の研究で積み上げてきた2つのプロセス（①一人学びで考えたことをもとに集団思考の中で学習を深める授業のプロセス、②最終的な学習の成果物のどの部分がどの程度できていけばよいかという評価の尺度としての評価指標を設定し、単元の指導計画の中に対応する指導場面を保障していく単元づくりのプロセス）に次期学習指導要領に明示されている学習過程の中で、異質な考えを有する他者と探索的な話し合いの場を設けて、児童の思考を深めるというプロセスを本校における「新たな学びのプロセス」と定義して取り組んだ。本年度は、その「新たな学びのプロセス」さらに確かなものにするため、

- (1) 「学習過程」の明確化と指導事項を意識した単元・授業づくり、
- (2) 「対話的な学び」を通した学びの質の向上、
- (3) 論理的な話し合いを促す関係づける思考の3点を中心に研究を進めてきた。

(1) 「学習過程」の明確化と指導事項を意識した単元・授業づくり

次期学習指導要領では、ただ活動するだけの学習にならないよう、活動を通してどのような資質・能力を育成するかを示すため、「思考力・判断力・表現力等」の各領域において、学習過程を一層明確にし、「C読むこと」では、表1のように各指導事項を位置づけている。

◆表1 学習過程と「C読むこと」領域の指導事項の構成（例 高学年）

	学習過程	指導事項
C読むこと	構造と内容の把握（説明的な文章）	ア 事実と感想、意見などとの関係を叙述を基に押さえ、文章全体の構成を捉えて要旨を把握すること。
	構造と内容の把握（文学的な文章）	イ 登場人物の相互関係や心情などについて、描写を基に捉えること。
	精査・解釈（説明的な文章）	ウ 目的に応じて、文章と図表などを結び付けるなどして必要な情報を見付けたり、論の進め方について考えたりすること。
	精査・解釈（文学的な文章）	エ 人物像や物語などの全体像を具体的に想像したり、表現の効果を考えたりすること。
	考えの形成	オ 文章を読んで理解したことに基づいて、自分の考えをまとめること。
	共有	カ 文章を読んでまとめた意見や感想を共有し、自分の考えを広げること。

本校では、「C読むこと」を中心に説明的な文章と文学的な文章の両方を扱い、＜構造と内容の把握＞＜精査・解釈＞＜考えの形成＞＜共有＞の学習過程に沿って単元づくりを行い、表2は文学的な文章で実践した単元の学習過程と指導事項に対する主な評価規準である。このように1時間の授業の学びの姿を評価規準で具体化し、学習過程に位置づけられた指導事項が身につくよう授業づくりを行っている。

<H29年度 研究の主張>

《新たな学びのプロセスの構築》

○新学習指導要領で明確化された**学習過程**の中で、他者との考えの**（ずれ）**に着目し、課題解決に向けて**探索的な話し合いの場**を設けて、児童の主体的な学びを目指す授業づくりを行う！

《対話的な学び》

○問題解決のプロセスの中で、**異質な他者との対話**の場を設け、**関係づける思考**を促すことで、新たな学びを生み出す**深い学び**を目指す！

◆表2 5年生 文学的な文章「世界でいちばんやかましい音」の実践より (H30.5.30)

	学習過程	指導事項に対する主な評価規準
C 読むこと	構造と内容の把握 (文学的な文章)	イ 登場人物の相互関係に着目し, [始まりの場面] [山場に向かう場面] [山場] [終りの場面] がどこで分けられるのか, 描写を基に捉えている。
	精査・解釈 (文学的な文章)	エ 「音」 以外の変化について町の人々の考え方や心情が自己中心的な考えから, 他人を思いやる気持ちへと変化したことを捉えている。
	考えの形成	オ 物語全体を通して変化したこと「音」(王子様, 町の人々, 町の様子, 立て札) やそれ以外のことの原因や結果について, 自分の考えを感想に書いている。
	共有	カ 物語を読んでまとめた感想について自分の感想との違いを見つけて, 友達の感想の良さを評価している。

(2) 「対話的な学び」を通じた学びの質の向上

表3の〔対話1〕のように, 教師と児童による一問一答の対話や, 児童と児童による考えを交流するだけの対話では, 児童は問いに対する答えが分かり, 自分の考えに自信を持つことには効果があるかもしれないが, 自分の考えを深めることには繋がらない。



それに対して, 〔対話2〕のように, 教師が学習課題や発問を工夫し, 児童の考え方の〈ずれ〉を引き出し, その考えの〈ずれ〉をもとに児童と児童による対話の場を設け, 論理的な話し合いを促すことは, 新たな学びを生み出す力がつく効果がある。本校では, 昨年度からこの〔対話2〕のあり方について, 対話する自他の何が「異質」なのかを自覚させた上で, 少人数グループを編成し, 他者との〈ずれ〉を活かして, 新たな分かりを構築させる学びを目指して取り組んでいる。

また, 〔対話3〕のように, 言語活動を位置づけた単元の中では, 単元の目的に向けて教師が, 児童一人ひとりやグループの課題に応じて, 対話的に関わり指導や助言を行うことが大切である。このような目的に向けて学ぶ単元の中では, 特に考えの形成や共有の学習過程で, 児童と児童による対話も学んだことを基に, どのように考えたかを評価・批判し合う活動などを通して, 学んだことを一般化したり, 活用したりする力をつけることに効果があると考えられる。



◆表3 対話による学びの質の変化

	〔対話1〕	〔対話2〕	〔対話3〕
教師⇔児童	・一問一答の対話	・考えの〈ずれ〉を引き出す対話	・児童一人ひとりや個々やグループの課題に応じた学びの改善に向けた対話
児童⇔児童	・考えの交流する対話	・他者との考えの〈ずれ〉について話し合う対話	・学んだことを基に, どのように考えたのかを評価・批判し合う対話
学びの質	・問いに対する答えが分かり, 自分の考えに自信が持てる。	・他者と関わりの中で, 新たな学びを生み出す力がつく。	・学んだことを一般化したり, 活用したりする力がつく。

(3) 論理的な話し合いを促す「関係づける思考」

次期学習指導要領では、「知識及び技能」の中に情報の扱い方に関する事項が表4のように新設された。アは情報と情報の関係、イは情報の整理を示している。これらは、「思考力・判断力・表現力等」（A 話すこと・聞くこと、B 書くこと、C 読むこと）の指導事項を通して指導することとされている。

そこで本校では、この情報の扱い方に関する事項を、児童に論理的な話し合いを促すのに有効なものとして捉え、兵庫教育大学大学院 勝見健史教授にご指導いただきながら、表5のように国語科で育成すべき論理的思考を支える「関係づける思考」として8つの思考に焦点化した。そして、この8つの「関係づける思考」の中から、教師が単元や授業のねらいに有効な考え方を見定めて、授業の様々な場面で意図的に促すことにより、児童に論理的に話し合わせ思考を深めることを今年度の研究の重点に据えて取り組んできた。

◆表4 「知識及び技能」に加わった情報の扱い方に関する事項

低学年	ア 共通、相違、事柄の順序など情報と情報の関係について整理すること。
中学年	ア 考えとそれを支える理由や事例、全体と中心など情報と情報との関係について理解すること。 イ 比較や分類の仕方、必要な語句などの書き留め方、引用の仕方や出典の示し方、辞書や事典の使い方を理解し使うこと。
高学年	ア 原因と結果など情報と情報との関係について理解すること。 イ 情報と情報との関係付けの仕方、図などによる語句と語句との関係の表し方を理解し使うこと。

H30年度
研究の重点

◆表5 論理的思考を支える関係づける思考

関係づける思考	思考の促し（例）	論理的な話し合いの表現方法（例）
比較	・○と□を比較して、同じ所（違う所）を考えましょう。	・○と□は、～なところが同じです。○と△は、～なところが違います。
類別	・～の観点から考えるとどのように仲間わけができるでしょう。	・～から見ると○○と□□は同じ仲間です。
分析	・～は、どのような要素から成り立っていると言えるでしょう。	・～は、A、B、Cから成り立っています。
理由づけ	・○○が、□□したのは、なぜでしょう。	・○○が□□したのは、～と書かれているから、～～だと思います。
推論	・○が□だとする根拠を複数挙げて説明しましょう。	・～と～ということから、□ではないかと考えます。
解釈	・○は、どのようなことだと言えるでしょう。	・これは、～ということです。
具体化・一般化	・○について、他の例を挙げてみましょう。 ・これらの例から、～はどのようなことだと言えるでしょう。	・○は、例えば～です。 ・これらの例から、～は○と言えます。
評価・批判	・～の観点から、○と□を比較するとどちらが良いと言えるでしょう。	・○は□のほうが良いと思います。理由は～だからです。

ア. 関係づける思考の活用場面

関係づける思考の具体的な活用場面として、まず、挙げられるのは、個人思考の場面で、学習課題に関係づける思考を埋め込み、考えの〈ずれ〉を引き出すことに活用することが挙げられる。4年生



の文学的文章「ごんぎつね」を例に挙げて説明する。この單元における主な指導事項は、C 読むことーエ「登場人物の気持ちの変化や性格、情景について、場面の移り変わりと結び付けて具体的に想像すること」である。この指導事項を身につけるために、教師が有効だと見定めたのは、【比較】の関係づける思考である。この【比較】の関係づける思考を意識して学習課題に埋め込んだ場合と意識しなかった場合には明確な違いが生じる。

表6①の〈関係づける思考を意識しなかった場合〉のアのような学習課題「行動や様子からごんの気持ちを読み取ろう。」では、児童は、どのように思考すれば、場面の移り変わりと結び付けてごんの気持ちの変化を読み取っていいのかが分からない。それに対して、②〈関係づける意識した場合〉では、いずれもある場面とある場面のごんの行動や様子の同じ所や違いに着目して、気持ちを読み取っていく【比較】の関係づける思考が埋め込まれている。関係づける思考を促すことにより、「どう考えたらいいのかが分からない。」児童も、【比較】の思考のすべを活用した思考過程で考え、本単元に身に付けさせたい国語科の力である場面の移り変わりや中心人物の心情の変化に迫っていくことができる。と考える。

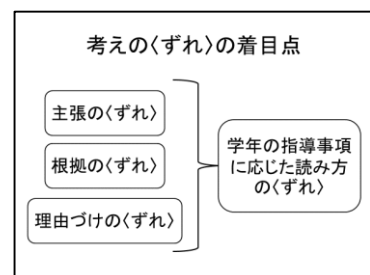
◆表6 関係づける思考を意識した場合の学習課題の変化

	① 〈関係づける思考を意識しなかった場合〉	② 〈関係づける思考を意識した場合〉	関係づける思考
ア	行動や様子からごんの気持ちを読み取ろう。	行動や様子からごんの気持ちは、前の場面とどう変わったかを考えよう。	【比較】
イ	この場面のごんはどんな気持ちだろう。	○場面と○場面では、ごんの気持ちはどう変わったかを考えよう。	
ウ	ごんの兵十に対する気持ちを考えよう。	前の場面よりもごんと兵十の気持ちは近づいただろうか。	

本校では、②のような関係づける思考を意識した学習課題から生じた考えの〈ずれ〉に着目し、対話の中でその〈ずれ〉について話し合うことで児童の思考を深める活用方法を見出してきた。当初は考えの〈ずれ〉の着目点について、授業のねらいや学年の発達段階に応じて、主張や根拠、理由づけの〈ずれ〉などの部分的な〈ずれ〉に着目して実践してきた。しかし、授業実践を積み重ねる中で、児童の思考を深めるためには、本時に身に付けさせたい学年の指導事項に応じた読み方の〈ずれ〉に着目することの大切さが分かってきた。

次に、関係づける思考の活用場面としては、グループや少人数による対話的な学びの場面や集団思考の場面で、個人思考から見出した考え方の〈ずれ〉に着目して学習を深めることに活用することが挙げられる。例えば、一般化や具体化などの関係づける思考は、授業の前半で学んだことをもとに、授業の後半にかけて単元の目的に向けた対話を通して、一般化を図ったり具体化を図ったりすることが有効である。

このように、関係づける思考の活用場面は、授業のねらいや学年の発達段階、活用する関係づける思考によって、変化させ児童に促していく必要がある。



イ. 関係づける思考の日常的な活用

この関係づける思考の促しを日常的に教師自身が意識し、児童にも自覚的に使わせるべく、学年の発達段階に応じて、図1の関係づける思考の一覧表を各教室に掲示し、表7に示した活用例のようにどの学年においても国語科に限らず教科横断的に取り組んできた。

1・2ねんせいのかんがえかた		3・4年生の考え方		5・6年生の考え方	
かんがえかた	はなしかた	考え方	話し方	考え方	話し方
くらべる	○と□は、～なところが おなじです。 ○と△は、～なところが ちがいます。	比べる	○と□は、～なところが同じで す。 ○と△は、～なところがちが います。	比較	○と□は、～なところが共通点で す。○と△は、～なところがちが います。
なかまわけ	～でかんがえると、○○ と□□はおなじ(ちがう) なかまです。	なかま分け	～で考えると、○○と□□は 同じ(ちがう)なかまです。	類別	～で考えると、○○と□□は同じ (ちがう)仲間です。
りゆうづけ	～とかかれていいるから、 ～～だともいます。	分せき	～は、A、B、Cからできていま す。	分析	～は、A、B、Cからできています。
よいところ みつけ	○は□のほうがよいとお もいます。りゆうは～だ からです。	理由づけ	～と書かれていいるから、～～ だともいます。	理由づけ	～と書かれていいるから、～～だ ともいます。
		推ろん	～と～～ということから、□ ではないかと考えます。	推論	～と～～ということから、□で はないかと考えます。
		良いところ 見つけ	○は□の方が良いと思いま す。理由は～だからです。	具体化	○は、例えば～です。
				一般化	これらの例から、～は○と言いま す。
				評価	○は□の方が良いと思いま す。理由は～だからです。

◇図1 学団別関係づける思考の一覧表

◆表7 3年生の各教科における関係づける思考の活用例

教科	関係づける思考	内容
算数	比べる	前の問題と同じところや違い
理科	比べる	ホウセンカとマリーゴールド(種の形、成長過程、種のできかた)
	仲間分け	昆虫と昆虫以外の生き物の体のつくりの違い
	分せき	仲間分けからの昆虫の体のつくりの特徴
社会	仲間分け	スーパーマーケットの品物はどこから来ているか

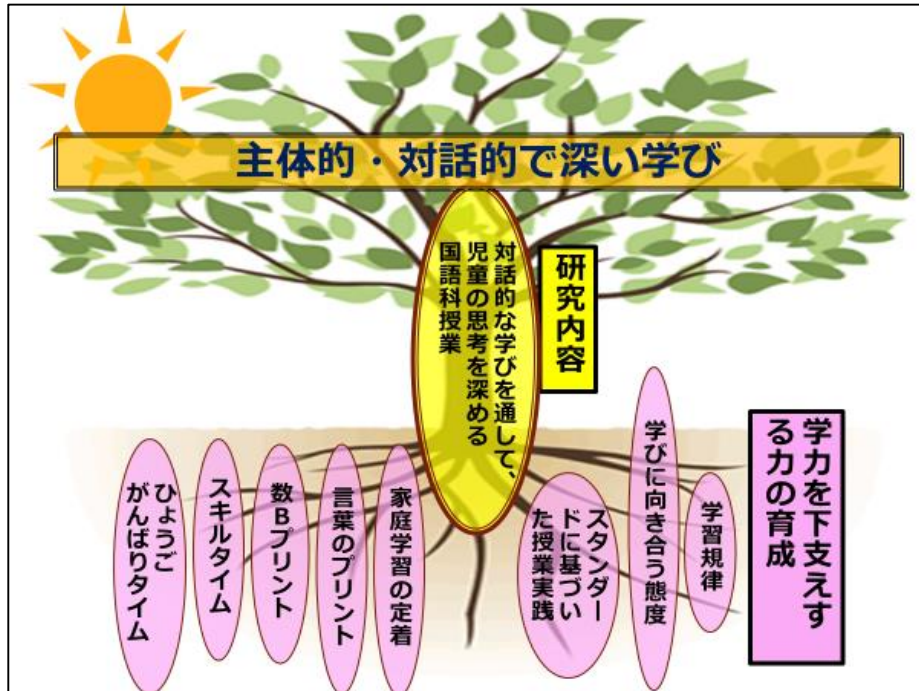
〈参考・引用文献〉

- 1) 勝見健史「『思考のすべ』を活用する論理的な解決プロセスを」『国語教育』No.803, 明治図書, 2016年, pp.36-39。
- 2) 勝見健史『「活用」の授業で鍛える国語学力ー単元・本時デザインの具体的方法ー』文溪堂, 2014年。
- 3) 勝見健史『ビフォー・アフターで取り組む国語科授業デザイナー「主体的・対話的で深い学び」へのアプローチ』文溪堂, 2017年。
- 4) 勝見健史「新学習指導要領における資質・能力と思考力・判断力・表現力」第2章【国語】第1節・第2節, 文溪堂, 2017年, pp.22-37。
- 5) 村上智一「新学習指導要領における資質・能力と思考力・判断力・表現力」第2章【国語】第2節, 文溪堂, 2017年, pp.38-43。

5 学力向上に向けた取り組み

本校では、国語科における研究と合わせて、図2の学力向上に向けた取組のイメージ図にあるように、学力を下支えする力を育成するために、様々な取り組みを行っている。そのうちの最も大切にしている「学びを下支えするための共通理解事項」について説明する。

この共通理解事項は、学びに対する真摯な姿勢や根気強さを培うために、本校の児童の実態と照らし合わせて研究推進委員会で設定したものである。4月の初旬に共通理解を図り、全職員で意識して取り組んでいる。また学期ごと達成度を振り返りながら、取組の改善を図っている。



◇図2 学力向上に向けた取組のイメージ図

(1) 授業の取組

①学習規律

- 姿勢：姿勢（ペタ・ピン・トン）
- 姿勢：机に脚をかけない
- 姿勢：シューズをきっちり履かせる
- 姿勢：姿勢を保持させる
- 書く時：鉛筆の持ち方
- 話す時：体の向き
- 話す時：口の形
- 話す時：発表の仕方（指示棒、電子黒板、書画カメラ）
- 話す時：話型（カーネーション発表）
- 聞く時：反応（似ていて、違って、よく分かりました、〇〇君の意見を聞いて）
- 聞く時：話し手を見る視線

(2) 学習方法

- 学習のめあてを提示する。
- めあてに対して振り返りを行う。
- 考えを持つ時間を保障する。
- 画一的なノートでなく、子どもの思考が位置づくノートを意識させる。
- 他者の考えを読み解くよう授業展開を工夫する。

（国語：主張・根拠・理由づけ）（算数：式・図・表）

- 時間設定に合わせて適切な問題量に取り組ませる。
- 書く力の育成 感想やふり返りを書かせる際には、字数を意識させるためにマス目用紙を使用する。
- 書く力の育成 すべての教科で、考えや思いを書かせる際には、内容に入れる条件と目安の文字数を設定する。(マス目入りのワークシートを作る)
- 書く力の育成 段落を意識して書かせる。
(1段落には○なことを, 2段落目には△なことを)
- 書く力の育成 低学年100字程度, 中学年200字程度, 高学年400字程度を決まった時間内に書ける力を育成する。
- 計算を見直したり確かめたり, 書いた文章を読み直したり推敲したりすることを習慣づける。
- 決められた時間内にやり遂げる力を身に付けさせる。
(学習の成果物の作成, 練習問題, テストなど)
- 日常的に学習用語を教師も子どもも意識して使っていく。
(例 段落, 序論, 根拠, 等号, 不等号, 倍数, 約数, 対角線, 辺, 角, 頂点, 種子, 日光など)

(3) テストの取組

- 問題の大事な部分(問いの内容や答え方)や本文から抜き出す部分に線を引かせる。
- 消去法で当てはまらないものを二重線等で消す。
- 確かめや見直しをした箇所にチェックする。
- 無回答を無くすことを意識づける。

(4) 授業以外の取組

- 基礎計算力の更なる定着や処理速度の向上のため, 朝のスキルタイムを継続実施する。
- 既習事項の定着ため, ひょうごがんばりタイムの実施学年を4年生~6年生とする。

(5) 家庭学習の取組

- 学年の発達段階に応じて, 漢字, 計算, 音読, 日記・作文, 言語事項, 理科・社会の内容等の宿題を出す。
- 丁寧な文字で書かせ, 誤答, 誤字の間違い直しを徹底させる。
- 家庭学習の手引きをもとに保護者・児童にも啓発を行い, 学年×10分以上, 集中して家庭学習に取り組む習慣を身に付けさせる。
- 高学年では, 自己課題解決のために, 自主学習に取り組む習慣を意識づける。自学自習に進んで取り組めるように啓発を行う。各教科の学習の振り返りとリンクした内容になることを目指していく。めあてや振り返りを自学自習のノートにも記入させる。
- 学力テストで課題となっている領域の学力定着を図るため, 「数と計算」領域以外の学習プリント(図形, 量, 面積, 体積)を「数Bプリント」, ローマ字, ことわざ, 故事成語などの言語事項領域を「言葉のプリント」と称して, 毎週金曜日の宿題として全校的に取り組ませる。



- ①習慣づけ
- ②内容・質の向上
- ③自分の課題に応じたこと

(6) 学ぶ構えづくりの取組

- 学びに向き合う子を育成する。
- 集団で学んでいることを意識づける。
- 自分勝手な言動を許さない。
- 他人の責任に転換させない。
- 学習に真摯に向き合う姿勢を身につけさせる。⇒達成感・自己の成長を味わわせる。
- 文章の長さや問題の量で, 心が折れないような根気やねばる力を育成する。